

トシイル阿千田越え ガイド

—めしごり（飯行李）と遊山箱—

・**昔日の土佐街道** 阿千田越え峠を通るこの街道は古来、奈良時代より南海道の一つ土佐街道として阿波国府から土佐国府に至る街道としての役割を担ってきた。標高80m、峠域山部1キロ野道1キロです。立江側から上ると麓にお水大師湧水があり旅人は喉を潤し足を急いだ。水は今も滾々と溢れ出ている、どうも水脈は剣山らしい。弘法大師(32歳頃)巡錫修験のおり民家で一夜を過ごされた際、この水で野天風呂を建てたことから据風呂谷の地名と足跡が残っている。一方岩脇側から上ると竹林孟宗竹の根張り絨毯、溪越えの岩石道にて昔日そのものに癒される。「昔の道案内：ノボリカネヤノオリエサン!？」。本街道は藩政時代以後人口増加と産業発展により背負いから牛馬へ、車へと移り峠越えは忘れられて、しばし出番を待っていた。

・**四国巡礼コース** 立江寺～取星寺う回鶴林寺への峠越えルートです。現在は立江～櫛淵勝浦鶴林寺への急ぎ道ですが、大昔立江寺(747年創)発奥の院取星寺(792年)う回は、街道阿千田越えを歩いて巡礼鶴林寺へ向う。今でも大先達は奥院を好むことが多いと言われている。ちなみに、奥院が三ヶ寺あるは、四国唯一立江寺ならではの風格。

・**源経尉義経峠を駆け抜ける 屋島攻め** 史実「吾妻鏡」に。1185年2月17日朝椿浦に漂着した五艘船団一門150騎は福井新野桑野長生上中、那賀川を渡って阿千田越え峠を貫通立江屋島へと攻めた。18日小松島旗山で隊を整え北進屋島到着、その時平家一門は義経奇襲攻撃を恐れて辺りには人影すらなかったと。軍事天才義経26歳。静御前大坂在

・**蜂須賀公ゆかりの地岩脇** 織豊時代の末期蜂須賀公が阿波に着任(1585年)始祖家政公は、よく立江から阿千田越えを岩脇に下りたち那賀川遊獵鮎漁など、そして折からの藪山降りそそぐ雪を眺め一帯あたりを「芳雪山」と名付けた。地元庄屋丹生氏に造らせた茶蘆・茶会の席でのこと。岩脇八景の一つ「芳雪山暮雪」と称賛される。

初代至鎮、忠英、後に三代隆光公は岩脇のお生まれ(1630)で、四代にわたり殿様の来遊が多かったゆかりの地。

・**黒船日和佐沖に現る** このとき、1853年「日和佐沖合いを臨む阿千田峠は藩庁の役人が夜日に次いで、松明をかざして駆け抜ける騒々しい日が幾日も続いた本街道であった。」と、爺さん話を伝承する古老はご健在。

—遊山しよう—

・**あるく 健康増進福利厚生之道** 小松島市立江町青木から隣接阿南市羽ノ浦町春日野西に沿って南進、峠越え、あすみが丘西口天神社を結ぶ土佐街道阿千田越えラインは、大方二時間もあれば誰でもが往復できる地形変化に富んだ道環境にて、昔のままの自然を存分に体感出来る。・渡来飛翔アサギマダラに出会う！ とりわけ羽ノ浦町が先に拓いた隣接ベッタタウン二ヶ所1600戸の庭先に、新しい元気道が実現する。より足腰の強いくらしへ、。

・**峠除草地域住民絵出のこと** 町史に残る毎年小正月1月15日の峠道掃除は、今日まで約70年間頓挫していたのですが、また里庭先に近づいていよいよ動き出そうとしている。両市に跨る地域絆のあかしである。

こたび、地元有志の奉仕行動により、さながら「近場の癒しのみち」に復活中。

・**立江寺から岩脇公園、峠越えぐるっと回ってハイキング構想** 先に県が作成の「立江寺サブ拠点遍路道整備計画」あり、岩脇公園ぐるっと一回り、阿千田を越えて岩脇新四国・さくら岩脇公園取星寺、そして古毛山路からは北へ里山「古毛越え」して立江町野神、立江の田帯を経て寺に戻る周遊コース(約4時間約8キロ)の整備が待たれるところである。

右回りでも左回りでも、じいちゃんやばあちゃんが子供のころ遠足や花見に遊山した思い出の道。

峠の阿千田橋地点は、今「歴史交叉点阿千田橋」と変わって、やまなみ遊歩道と出会う。隣接桜広場は格好の遊山場。

□記事根拠：これらの表現は、おもに図書館蔵書、羽ノ浦町町史、吾妻鏡などから引用 又、郷先達のお話による。

□作：峠道の復活とトレイルを楽しむサークル おもに羽ノ浦町立江町有志及び団体に集う「あせんだ峠の会」

— 徳島県下峠有数100ヶ +オンリーワンを目指しています。 — (峠守A・Tel.080-5668-7979)